

先日ある檀家さんへ月参りにおじゃまいたした折、年末に親族を亡くされた方が、「忌明けまで神社にお参りしてはいけな
いでしょうか」というお尋ねがありました。

仏教では、生死という言葉を使い「生」と「死」を別々のもの
と見ないのです。当然の事として、「死」をケガレとして見る
ことはありません。

私たちは必ず死を迎える時がやってきます。死を迎えた私た
ちの存在は、決してケガレた存在ではないことをお釈迦さまは
教えてくださいました。そして宗祖親鸞聖人は、いのちあるも
のはすべて等しく阿弥陀仏に救われてゆく存在であることを示
されました。

阿弥陀仏に救われる存在とは、阿弥陀仏の願いにより仏とな
ってゆく存在です。私達が仰ぐべき仏となってゆく「いのち」
です。

生前、「父よ」「母よ」「兄弟よ」と親しんできた方を亡くなっ
た途端に「ケガレたもの」と思うことは如何でしょうか。

また、最近耳にすることですが、「墓じまい」「仏壇じまい」「年
回りあげ」等々、私たちの身のまわりでささやかれている事
は、いかに自分達で何もかも終わりにして、次世代につなぐと
いう事を考えないさみしい世の中になってきています。

子どもたちに世話をかけたくないからという理由だけで、わ
りきれぬでしょうか。

「前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え」
のごとく、

先に行くものは、「たのむ」の一念でいいのではないでしょ
うか。